

---

# 漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

金貨の騎士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

漂流者はハイブリッドな現役将校〜オヒトヨシナシニゾコナイ〜

### 【Nコード】

N0721X

### 【作者名】

金貨の騎士

### 【あらすじ】

地球、海鳴市にやって来た次元漂流者は魔法と質量兵器の両方を使用する軍人だった……。作者はこれが初挑戦な初投稿です。どうかよろしくおねがいします。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、金貨の騎士です。よろしくお願ひします。

## ブローグ

### 緊急報告

第374特別調査地区の探査中、突発的次元崩壊が発生。崩壊そのものは元々危惧されていたため特に問題は無く、調査地区の全技術データも回収に成功。

しかし、

その次元崩壊に1名、この部隊の指揮をとっていた《ファイア・レイガード》が巻き込まれ、  
行方不明となった。

彼の損失は第374地区の全技術データ消滅以上の痛手になるため、目下捜索中である。

ベルファイア連邦政府軍第七師団L大隊副隊長リオル・ヴェルシア  
中佐・記

第一話（大修正）（前書き）

いざ参らん本編に。

## 第一話（大修正）

第97管理外世界・地球・海鳴市・18：28

???side

・・・えくと、とりあえず落ち着け俺、冷静になれ俺。ゆっくりでいいから自分の事を思い出せ俺。  
名前はフィア・レイガード、二十歳、職業軍人、独身。よし、完璧。とりあえず・・・

むくり

起きよう。しかし全身ズキズキするが特に・・・

「・・・頭痛えええ・・・。酒でも飲んだっけ？」

そうだ、さつきまでみんなで居酒屋にでも行ってそのまま路上で眠ってしまったんだ。そうに違いない。

断じて亜空間での任務中に事故って時空をジャンプしたわけ・・・

《フィア・・・あなたが参加した飲み会は2年前が最後ですよ？》

「なんか俺が寂しい奴みたいな言い方だけど、仕事が忙しかっただけだからな！？そしておはよう！！リリア！！」

フィーアは左腕に着けている腕時計のようなサポートAI兼通信機のリリアに返事を返した。

「・・・リリア、いったい何が起きたんだ？」

《あなたがだいたい覚えてる通りだと思いますが？》

「構わない、状況を報告せよ。」

幾分口調をまじめにし、そう言った途端にリリアの口調もそれに対応するがごとく変化した。

《報告。 民歴56年5月。 我々第七師団I大隊は大隊長の指揮のもと突如亜空間に出現した第374特別調査地区の探査及び技術データの回収の任務を遂行。 しかしその終盤で危惧されていた時空崩壊が発生、部下の退避を優先した指揮官1名が脱出に失敗、現在行方不明扱いとなっております。》

「その行方不明者ってのは当然・・・」

《あなたのことです。》

あちゃあくと額を抑えながらフィリアは呻いた。そういや新兵が時空崩壊から逃げ遅れていてそいつ助けてたら自分は間に合わなつかたんだっけな・・・

「一応確認するが俺の頑張りは報われたのかい？」

特にその新兵と自分の副官であり親友のリオルが気になる・・・

《死人0、行方不明者もあなただけ、というのが今の私の最後の記録です。》

「お前が言うならそうなんだろ・・・まあ少し気が楽になったよ。」

さて、これからどうしようか。通信機兼サポートAIのリリアに軍から通信が無いところを考えると、エライ遠くに跳ばされたんだろうな・・・。このリリアは銀河一個分離れた場所からリアルタイムで通信できる程高性能なのだ。そのリリアに通信が一個も無いということはここがリリアが圏外になるほど遠い場所にいるか、軍に捨てられたかの二択しかないのである。後者にいたっては自分は即行でクビになるほど上官にも部下にも嫌われてないので無い筈。ていうか後者だったら泣く・・・。



「まあ、何にせよここがどんな世界だか調べるのが先決かな？」

《そうですね、この世界の生活水準もさほど低く無さそうなのでサバイバルすることも無いでしょうからまずはこの世界の知識を集めましょう。》

「よし！そうと決まれば早速っk《警戒！！9時方向！！》……え？」

あゝ、俺そういえば路上にいたんだった。周り見りゃリアの言う通り割と文明高そうじゃん、てことは自分の世界にもあった車輪が4つ付いたアレ……

ドキヤア！！

……いつまでもいたら自動車を通るに決まっているじゃん……もつとも、“この程度”で俺は死なないのだが……。

キリモミ状態で空中を舞うさなか、フィーアは視界の端になんとも言えない表情でこちらを眺めている金髪の少女と犬耳の女が見えた気がしたがハッキリ確認する前にこの世界に来た時同様“また”顔面から地面に落ち、視界がブラックアウトするのだった。

《・・・先が思いやられます。》

**第一話（大修正）（後書き）**

感想、指摘お待ちしております。

## プロフィール（前書き）

オリ主フィアアの紹介

## プロフィール

名前 フィーア・レイガード

年齢 満二十歳

性別 男

職業 軍人（階級については黙秘）

容姿 赤みのある茶髪で瞳は紺色。

顔はよく優男呼ばわりされる程度に整っている。  
やや長身長屈。

服装 故郷の軍隊の軍服と士官帽を装着。旧日本軍の軍服に似ている。

全体的に黒色で、控え目に金色の装飾とボタンが付いている。  
フィーアの軍服はカスタムされており上着の裾が膝まで伸びている。

性格 基本お人好しだが、悪知恵がよく働くため抜け目が無い。

戦術 剣と銃と魔法と気功術

## 第二話

フエイトside

魔導士フエイト・テスタツロッサは困惑していた。

母親の指示のもと、ジュエルシードというロストロギアを集めるため海鳴市を一通り探索し、ひとまず今日は切り上げ、自宅兼拠点にしているマンションへの帰り道の途中に倒れている男を見つけてしまったのである。その男がただの人間なら別に対処に困ることもなかったのだが、

《マスター、あの男から魔力反応があります。》

自らの愛機バルディッシュのこの一言によりどうするべきか悩む八メになったのである。

（この管理外世界に魔法文化は無かった筈・・・ということとは、あの人は時空管理局員か次元漂流者のどちらか・・・）

今、自分たちが管理局と接触するのは非常にまずい。しかしこのまま放置した場合、後々敵として脅威になるかもしれない。何より漂流者だった場合、彼女の性格上ほっとくこともできなかつた。

この葛藤としばらく戦い続けること数分、

「 エイト、フェイトつたら!！」

「っ!、ごめんアルフどうしたの?」

使い魔のアルフが声をかけてきた・・・というかさっきから呼んでいたらしい。集中しすぎて聞こえなかったようである。

「 アイツ目が覚めたみたいだよ。」

そう言われアルフの指さした方を見ると確かに男はむくりと起き上っていた。改めてよく見てみると、その姿は全身黒色で物々しく、腰には日本刀とレイピアが合わさったような剣がぶら下げられていた。

確実にこの世界の人間じゃ無い。

フェイトはそう結論付け、一層警戒しつつ観察することにした。

「・・・なんか一人で喋りだしたね。(・・・変な人。)」

「いや、左腕に付いてる何かに話しかけてるみたいだよ。」

「アルフ、見えるの？」

「フェイトがバルディッシュと話してる時もあんな感じだからなんとなく・・・。」

「・・・。」

一瞬痛い人に見えたあの人と同じようなことを自分がしてることを知って少し凹んだフェイトだった。

そうやって落ち込んで顔を俯かせている間に男は何かを決心したように立ち上がったのだが・・・

「・・・あつ。」

ドキヤアー!!



アルフの間の抜けた声とすさまじい音が聴こえたので顔を上げて視線を向けると、男が自動車に派手に撥ねられていた。途中、目が合ってしまったが気にする前に男は顔面から地面に落ちた。

突然のことに二人はパニックに陥った。

「ど、どど、どうしようアルフ!？」

「落ち着くんだフェイト!!えくと、こういう時は9111だか117とかいう場所に電話するんだ!! あれ?なんか違う気がする・・・」

「私、電話なんて持ってないよ!!」

「あゝもう!!!どうすりゃいいんだい!？」

二人がカオスの極地に陥るその間際、それをくいとめる存在が現れた。

「痛えな畜生!!いきなり過ぎんだろっが!!何が《警戒九時方向》だ!!」

《気づけなかったうえに避けなかったことが恥ずかしいのは解りますが私に当たらないで下さい。》

何事も無かった(？)ようにピンピンしながら混乱の元凶がもう復活していた。

フェイトとアルフはもう啞然とするしかなかったのだが、もう彼を無視できない存在であり状況であると覚悟した。なぜなら・・・

「さて、余計な会話はここま《凶星だったんですね？》やかましい！！・・・おい、その二人。

少し一緒に会話するのと口封じされるの、どっちがいい？」

元凶フィニアがこっちに向かってそんなことを言ってきたので二人は再び混乱しそうになった。

### 第三話（前書き）

文才が欲しい……。グダグダ感が無くならない……。

## 第三話

ファイア side

・・・我ながらこれはないわ r z。いきなりこんな小さい子に「お話と口封じ」の二択って俺なに言っちゃてんだろう・・・。あゝあ、金髪の子はなんか武器的出すし、犬耳は牙剥いてるよ...。リアの言う通り、いつも軽く“避けれる”筈のモノにまるで反応できなかつたことに動揺していたのもあるが、それを差し引いてもさっきのセリフはナイ・・・。

《大人げない、みにつちい、最低、チンピラ、外道・・・》

「それ以上言わないでくれ、トドメになる・・・。えゝと二人とも今のは本気にしないでくれ。お話したいのは本音だが、危害を加える気は無い。」

《おまけにロリコンですか。》

「今のでなんでそうなる!?!」

「・・・あの、すみません。先に一つ訊いていいですか?」

「おっとすまなかった、いいぞ何だ？」

「・・・あなたは時空管理局の人ですか？」

若干緊張を含んだ口調でそう訊いてきた。今ので分かったことが四つ。

1つ。時空管理局なる組織が存在する。

2つ。彼女の口調からして、これは俺が敵か味方かを確かめる質問。

3つ。つまり時空管理局とそれに敵対する勢力がある。

4つ。彼女らはそのどちらかに所属してる。

(て、とこだろう。さて一番無難な返事は・・・)

「とりあえず、俺は時空管理局がなんなのか知らない。」

馬鹿正直に答えることにした。どうやらその選択は正解だったようで彼女の緊張が少し解けたようだ。

フェイトside

（最初の「口封じ」発言にはすごい焦ったけどそれほど敵意は持っていないみたいだし、何より時空管理局ではないなら大丈夫かな？）

バルディッシュを起動したままだがフェイトはそう思い、少し警戒を緩めた。

「じゃあ、あなたは次元漂流者なんですね？」

「それもなんなのかわからないが別世界から流れてきたのは認める。」

それを聞いてとりあえず一安心することにした。次元漂流者なら自分達と特に敵対する理由もないはずなので戦うこともないだろう。

（でもコイツ十分胡散臭いし、怪しい奴だと思っよ？変な格好してるし・・・）

念話でアルフが話しかけてきた。確かに目の前の人はこの世界でも自分達の世界の感覚からしても異質な格好である。軍服で堂々と帯剣してる人なんて尚更初めて見た。

・・・確かにもう少し素性を訊いたほうがいいかもしれない。と思  
った矢先、

《変質者の称号もGETしたようですね》

「もしかして八つ当たりしたこと本気で怒ってるのか！？あと犬女、  
前半二つはともかく最後の二つは撤回しやがれ！！」

「アタシは狼だ！！って、アンタ今の念話聴こえたのかい！？」

「ん？思念通信でなく念話って言うのかそれ？」

《通信用電波使ってないと思ったら魔力しか使わない別物のよう  
です。一応通信波は拾えますが。》

いきなり会話に乱入してきた。しかも知らない言葉が出てきた。

「思念通信？」

「俺達の世界の通信手段のひとつだ。ていうかいい加減にお互い名

前くらい名乗らないか？」

そつえばまだお互いの名前すら知らなかった。

「それもそうですね。私はフェイト・テストロッサ、魔導士です。」

「フェイト!？」

まさかすんなり名乗るとは思わなかったのでアルフは驚いた。

「多分この人は見た目ほど悪い人じゃないから大丈夫だよ。」

見た目は悪いってことかよ…とフィーアが落ち込んだのは内緒である。

「フェイトがそう言うなら……。アタシはフェイトの使い魔のアルフだよ。さつきも言ったけど犬じゃなくて狼だからね?」

「それと、私のデバイスのバルディッシュです。」

《よろしくお願ひします。》



ファイア side

金髪の女の子がフェイトで、犬耳…じゃなくて狼耳がアルフで、武器がバルディッシュか。バルディッシュにもリリアと同じように自我を持つてるようだな……。うちの子に影響されなきゃいいが…。

「次は俺たちの番だな。ベルファイア連邦政府軍、L大隊所属ファイア・レイガードだ。」

《先行試作型装着式オペレーター、No12、リリアです。》

全く聞き慣れない単語が出てきたせいかわフェイトとアルフはポカンとしていた。

「…えっと、リリアはデバイスじゃ無いの？」

フェイトがリリアに尋ねた。

《あなたの言うデバイスとは、そのバルディッシュが基準と考えていいですか？》

コクリと頷いて返す。

《デバイスは器はともかく原動力や構成、発生させる物のほとんどが魔法や魔力のようで、しかも武器としての役割が多いようですね。ですが私の場合、デバイスと違い魔法より機械の割合が多めで造られています。なにより私はどちらかというとコンピューターや通信機のような役割が仕事です。》

「これ俺達の世界では普通なんだけど聞いたことない？あとベルフイーア連邦も？」

「全然」

「……こりゃ本格的に帰れないことを覚悟しなきゃいけないかもしれない。この技術は自分の世界だけでなく全“同盟世界”での常識なのだ。ここは完全に自分の知らない世界で、知らない宇宙のようだ。」

「まあ、いいや。とりあえずよろしくな。」

「うん。よろしく。」

・・・そういえば、いつのまにかタメ口きかれとる。

こうして魔導士と将校の邂逅はようやく一段落した。

## 第四話

フイーア side

自己紹介も終わり一息つき、立ち話もなんなので歩きながら話すことにした。その途中、時空管理局と次元漂流者の説明をもらった。正直、時空管理局とは組織的に接触したくないし、自分の世界と接触させるとヤバイ気がする……。なんて考えてたら、

「とじろでさあ。」

「ん？」

「フイーアの世界ってどんなところなんだい？」

アルフが尋ねてきたきた。

軍事関係ならともかく故郷についてなら幾分喋ってもいいか……。

「俺の世界はな、リリアを見てほしい分かんと思うけど科学と魔法が共存してる世界なんだよ。魔法を科学で補い、科学を魔法で補う。俺達自身は“魔道科学”って呼んでるけど。おかげで周囲と比

べて随分と出鱈目な世界になってるけどな……。」

「へえ、なんかよく解んないけどすごいんだね。」

よく解んなかったのかい……

「……そして、その出鱈目な技術を使って時空管理局のように別世界と交流がある。」

「え!?!」

今の発言でフェイトも会話に参加してきた。さっきの管理局の説明を聞く限り、別世界：もと別次元世界だっけか?と交流する技術を有するのは管理局のあるミッドチルダとごくごく一部だけ、みに言ってたがここまで驚くことかね?

「そんなにすごいのか?」

「少なくとも私たちは管理外世界や認知外世界でそういう世界は聴いたことがないよ。」

「うーん、ますます管理局と会いたくないな……。」

接触したくないのにあっちが興味を示すようなことのオンパレード  
じゃねえか……。

「どうして？ 私たちはともかくフィーアは次元漂流者だから保護し  
てもらえば……。」

“私たちはともかく” ってやっぱこの二人、管理局とトラブル  
抱えてるのか……

《そのあとがマズイのです。》

「リリア……？」

しばらく喋ってないからいるの忘れてたよ……。

《仮に保護してもらって私達の世界、ベルフィーア連邦に送っても  
らったとしてその後、時空管理局が連邦をほっとくとは思えないの  
です。》

「さっきも言ったが俺達の世界の技術の半分は科学だ。それに比例  
して軍事力も半分くらいが科学兵器……管理局が根絶を目指す質

量兵器つてやつなんだよ。交流のある同盟世界にいたっては、連邦のおかげで魔法の存在は知ってても馴染まないで科学一筋の世界もあるくらいだ。」

もし連邦がこの地球みたいに魔法文化がなければ管理外世界ということで片付くのだが、生憎かなりの高水準で普及している。十中八九接触を目論むだろうがその半面、自らが否定する質量兵器も同じくらいの割合で存在している。管理局は間違いなく質量兵器、すなわち科学を捨てると言いかねない。そして連邦がそれに従うわけもない。最悪戦争に発展しかねない。

「つーわけで何かしら考えてからじゃない限り管理局とは会いたくない。」

「アンタも大変だねえ……。」

ただでさえ遭難中だったのに敵対勢力候補の存在って、もう胃が死ぬわ……。

「本当にこれからどうし

ん？」

《北部数キロ先に魔力反応を確認！！かなりの出力です！！》

リリアの言う通りかなり大きな魔力を感じた。これは放置したらマズイレベルだなオイ……。

「ッ！！フェイト！！」

「ジュエルシードだ……！！」

二人はコレの心当たりがあるみたいだな。

「おいフェイト、これはいったい何なんだ？」

「ごめん、説明できない……。とにかく私達はもう行かなきゃいけない。行くよアルフ！！」

「待つてよフェイト！！えっと……。じゃあね、フィーア。とにかく頑張りなよ！！」

そう言つてフェイトは飛び去り、それを追うようにアルフも飛び立った。魔力光の光で二人が流れ星のようだったのは措いといて、フィーアはあまりの急展開にしばしポカンとしてしまった。別に二人が飛んだことには驚かなかったが、災害レベルの魔力反応の発生源に迷わず即効で向かつて行った二人に啞然としていた。



「大丈夫か？あの二人……。」

《発生直後程の出力はありませんが現在も反応は消失していません。》

そうか、だったら……

「行くか……。」

《あまり目立つ真似をすると管理局とやらと接触する可能性が増えるのでは？》

「ここが連邦の未開の地で、管理外とはいえ管理局の縄張な時点で接触は避けられないさ……それに、あんな子供をほっとくわけにもいかないだろ？」

またコイツ《ロリコン》とか言ってるからかっつきそうだが、あんな10歳にも満たない子供が危険な場所に行ったというのに軍人の自分がそれをほっとくなんて出来るわけないし、する気もない。

《あなたらしいですね。》

意外と普通に喋ってきた。

「そりゃどうも。ついでに言っとくが俺はロリコンじゃねえぞ?」

《知ってますよ。そして、あなたがお人好しなことも。》

そして、リリアは改めて言う。

《ついて行きましょう、どこまでも。》

フィアは短く、だが真剣に返す。

「感謝する。」

その日、海鳴の夜空に金色と朱色の流星を追うように黒い影が空を舞った。

## 第四話（後書き）

次回初戦闘描写。書けるかな…。

## 第五話（前書き）

本格的な戦闘は次回になっちゃいました・・・

## 第五話

アルフside

アタシの御主人様のフェイトは一流の魔導士で、なにより優しい自慢の主だ。でもちよつと天然なところもあつて、なんだかんだ言つて年相応の女の子なんだと思う。それはいいことなんだろうけどやっぱり・・・

「今は勘弁してほしいよおおおおおおお！！！」

アルフはそう絶叫しながらその自慢の主、フェイトを抱えて爆走していた。なんでこんな状況になつたか説明するため少々時間を戻す。

〈十分程前〉

「反応があつたのは、ここだね・・・。」

使用者の願望を歪めた形で叶えるといわれるロストログア、ジュエルシード。その反応を辿つて二人は山の方までやってきた。

（あの鬼ババにフェイトが酷いことされないうちにさっさと全部終

わらせないと・・・)

内心でフェイトの母親に毒づきながらも周囲に被害が出ないように結界を張りながらジュエルシードを探す。ところが違和感に気付いた。ふいに視線を向けるとフェイトが棒立ち状態で固まっていた。おまけに使い魔の自分は主の精神とリンクしているためフェイトの今の精神状態が分かるのだが、さっきから上の空というか呆けているというか、とにかくボケっとしていた。

「ちょっとフェイト、なにボケっとしてんだい。」

不審に思いながらフェイトの方にアルフは歩み寄る。

「フェイト！！いったいどうして・・・。」

そっから先は言葉が続かなかった。なぜならフェイトが見ているものをアルフも見ただからである。

8つの目をギラつかせ、8つの足を蠢かす、“人間サイズ”になった蜘蛛の群れがそこにいた・・・

〈回想終了〉

そんなわけで、今アルフは目をグルグル回しながら顔を真っ青にして気絶したフェイトを抱えながら、ジユエルシードで巨大化した（種族的に繁栄したいとでも願ったらしい）蜘蛛の大群から全力で逃げていた……。

「ていうか何でそんなに足速いのさ!?ぎゃあああああああ!」

飛びかかってきた一匹を必死に避ける。長い8つの足をゴキブリのごとく高速で動かしながら、使い魔のアルフとほぼ同等のスピードで蜘蛛は追いかけてきている。今すぐにでも結界を解き、そのまま空を飛んで逃げたいが、蜘蛛が外に被害を出すかもしれないので多分フェイトはそれをよしとしないだろう…。せめてなにかしら指示をくれればいいのだが当の本人はただいま絶賛失神中である。

「あゝもつっ!!お願いだからフェイト起きてええ!!」

「う……ううん……。」

「フェイト!!」

フェイトさんがログインしました。

「あれ？アルフおはよう。」

「寝ぼけてないでアレなんとかしておくれよ!!」

「え？（巨大蜘蛛の大群を見る）・・・キュウツ・・・。（ガクツ）

」

「ちよつとおおおおおおおお!!?」

フェイトさんがログアウトしました・・・。

巨大蜘蛛さんがログインしました。（ピヨーン）

シヤアアアアアアアアアア!!

「来んなああああ!!」

もう駄目だと思ったその時、アルフでもフェイトでもない誰かの声が響いた。

「伏せっ!!」



アルフは反射的（本能とも言う）に姿勢を低くした。その後、頭上を青白い閃光が通り過ぎ、飛びかかってきた蜘蛛に直撃した。蜘蛛はそのまま吹き飛ばされ、ジュエルシードの効力がなくなり空中で霧散した。アルフは何が起きたか分からず、とりあえず後ろを振り向く。すると、さっきまで自分たちを追いかけてきた蜘蛛の群れが追跡の足を止めていた。まるでこちらを威嚇するように……。

「まさかホントに伏せつつって伏せるとは……。」

《結局、狼も犬科ですからね。》

声のした方、前を向くとそこには左手に銃身がやや長めのピストルを持ったフィーアがいた。

「ア、アンタついてきたのかい！？ていうか封鎖結界はどうしたのさ！？」

《私が解析して勝手に入口を作らせていただきました。今はちゃんと閉じてありますのでご安心を。》

「それでアルフよ、このゲテモノ集団はなんだ？放射能でもぶちまけたのか？」

《全個体に魔力反応を確認。出力は分散して劣っていますが最初の反応物と同種のもです。ですが発生源である反応物は別の場所にいるようです》

「ややこしいから最初の反応物を『ターゲット1』とする。こいつらは『エネミー』として随時番号を追加、同時にお前は『ターゲット1』を探知しろ。」

《了解》

着々と話しを進めていくフィーア達にアルフは戸惑った。

「ちょっと、アンタら何する気だい!？」

「この騒動を静める。」

「ジュエルシードはホントに物騒なモノなんだよ!？」

「そんなのコレ見りゃ分かるさ。ついでにあのフザケタ出力でこの不安定具合……、災害どころか下手に暴走させりゃ世界滅亡クラスじゃねえか……。」

《直接破壊するのは危険なので制御して強制停止させましょう。》

フィーア達はアルフとフェイトがやるうとした『ジュエルシールド封印』とほとんど同じことをするつもりらしい。しかもこの二人（一人と一機）、よく考えると自分の張った結界にすんなり侵入してきたのだ。魔法の腕もそれなりなのかもしれない。なにより、あの蜘蛛の大群にはもう精神的にも本能的にも戦う気力が湧かなかつた。フェイトにいたっては、まだ意識すら戻って無かつた……。

「……じゃあ、任せるよ。」

結局フィーアとリリアに任せることにした。

「はいよ任せな。さて、単独の戦闘なんて本当にいつぶりだろう……」

《し大隊の隊長になってからは誰かしら随伴してきましたからね。あなたの階級を考えると異常に少ない人数でしたが……。》

「上の連中が「戦果に見合わん」って言いながら無理やりよこした階級だもの。大尉以上のことはやりたくなかったのに書類仕事が増えたのなんの……。なにせよ、久々に遠慮せず殺らせてもらう。そろそろ索敵終わった？」

《完了しました。アルフさんが張った結界の中に『エネミー』が1  
↳48体、周囲に展開中。さらに『ターゲット1』と思わしき反応  
が北東に確認されています。》

それを聞いたフィーアは右手で剣をゆっくり引き抜き、口角を吊り  
上げ、獲物を見つけた肉食獣のような表情を浮かべた。アルフは場  
の空気が変化した気がした。

「数はさっきのを入れて50匹……。少々もの足りないが、これ  
からの厄介事への準備運動だ……。せいぜい長引かせるよ……。」

今のフィーアにフェイト達と出会った時の雰囲気は一切なく、そこ  
には一匹の獣がいた。

《全『エネミー』、行動を開始しました。こちらに接近してきます。  
》

瞬間、獣が雄たけびを響かせた。

「交戦を開始する……。来るがいい虫けらども!!一匹残らず滅  
ぼしてくれろ!!」

異世界からきた漆黒の魔獣が咆哮を上げ、戦場に踊り出た。

第五話（後書き）

フィアのセリフが厨二臭くなっちゃった・・・orz

## 第六話（前書き）

ぐあああああ戦闘描写が書けねええええええええ！！

## 第六話

フェイス side

「あれ？アルフおはよう。」

「さっきとまるっきり同じセリフだね……。また気絶しないでよ。……？」

「気絶？……ッ！！」

言われてトラウマ確定のあの光景を思い出す。

「ア、アルフ！！蜘蛛は！？ジュエルシードはどうなったの！？」

「とにかく落ち着いて。そして蜘蛛共はホラ……。」

そう言って横を指差す。視線をそちらに移した瞬間、壮絶な光景が目に入った。黒い影が大蜘蛛の群を相手に大暴れしていた。青白い閃光で撃ち抜き、鋭い斬撃を叩き込み、強烈な蹴りを喰らわせ、蜘蛛たちは黒い影により次々とその数を減らしていった。



《現在確認できるのは『エネミー』が8体と『ターゲット1』のみです。》

「フン、つまらん……。オラア!!その程度か!？」

「……ファイア!？」

自分のやってることに関わらせないため挨拶もそこそこに置いてきた筈の男、ファイアがいた。

「アルフ!!どうしてファイアがここにいるの!？」

「どうやら付いてきたみたいでさ……。アタシの結界もアツサリこじ開けて、しかもコイツらをどうにかしてやるっていつから任せた……。」

「なんで!?!？」

「だってフェイト起きないんだもん……。」

「……ごめん。て、そんな場合じゃ無いや！コレは私たちがやらないと……。」

「もう、終わるみたいだよ？」

「え？」

蜘蛛はもう3匹しかいなかった。完全にフィアに恐れをなしたように、蜘蛛共は怖気づいたようにギリギリと威嚇しながら後退していた。

《残りはこの『エネミー6、14、29』と『ターゲット1』のみです。》

「そんじゃ飽きたし、もう終わらせるか。」

瞬間フィアは駆け出す。蜘蛛が迎え撃つように上下に二匹、同時に跳びかかる。それにフィアは微塵も焦らず軽くジャンプし、足を狙ってきた一匹を避けながら銃弾を叩き込み、そのまま頭上に跳びかかってきた一匹を剣で貫いた。瞬く間に二匹は霧散した。

「ハイ、ラスト。」

振り向きざまに後ろから跳びかかってきた最後の一匹に回し蹴りを喰らわせ、宙を舞ったところに銃弾を放つ。青白い閃光、リニアガンの弾丸が蜘蛛に直撃し霧散させた。

(暴れ始めてから2分たって無いと思うよ……?)

(す、すごい……。)

改めてフィアが軍人、兵士であることを認識した瞬間だった。

《『エネミー』の殲滅を確認、残るは『ターゲット1』のみです。》

「了解。おや？起きたのかフェイト。」

フィアはこっちに気づいて近寄ってきた。

「……フィア。なんでついてきたの？」

「俺の職業は軍人って言ったろ？こういう厄介事には首突っ込まなきゃ気がすまない体質なんだよ。」

「でも……。」

「ちよいタンマ、本命が来るらしい……。」

《巨大な魔力反応の接近を確認、『ターゲット1』です。》

「ッ！！バルディッシュ！！」

《Yes・sir》

フェイトはデバイス、バルディッシュを起動させた。アルフも戦闘態勢に入る。

「ん？そのまま休んでいいぞ？」

「そういうわけにもいかない……これは私たちがやらなきゃいけないんだ……。」

「……しょうがねえな。ただし、無理矢理にでも手伝わせてもら  
じぞっ」

「せっかくだし、手伝ってもらおうよ。フィーアってすごく強いみたいだしさ？」

「・・・分かった。」

アルフの言葉もあり、フィーア達にも手伝ってもらうことにした。自分のやってることに巻き込むのは本音を言つと躊躇うところがあるのだが、実際に先ほどのフィーアの戦闘を見るかぎり、フィーアの戦闘技術は凄まじく高く、さらにアルフの結界に侵入できるほどの魔法の腕もあるので心強いものがある。そもそも、自分が気絶してる間に大蜘蛛の群を蹴散らしてもらった時点で今更な話なのかもしれない・・・と、そこへフィーアが話かけてきた。

「ところでフェイト、お前らあの物騒な魔力反応物を・・・壊してきたのか？」

「違うよ！！それにジュエルシードは無理矢理壊そうとしたら大変なことになるんだよ！？」

血相を変えて答えた。下手にジュエルシードに刺激を与えて暴走させた場合、次元震が発生し世界が崩壊することもあるのだ。当然そんな真似はしない。

「それじゃあ、そのジュエルシードとやらの壊す以外の止め方は知ってるんだな？」

「うん。」

「じゃあ、ジュエルシードはフェイトに任すわ。リリア、『ターゲット1』の情報は？」

《分析の結果、『エネミー』が一回り巨大化しただけでしかも動きが鈍いようです。しかし、魔力反応の発生源はコイツで間違いないようです。接触まであと3分です。》

「「うわぁ・・・」」

さっきの大蜘蛛達より大きいと聞き、フェイトとアルフは顔を青くした。そんな二人に苦笑いを浮かべながらフィーアは話を続ける。

「親玉とでも呼ぶか・・・。アルフ、結界を造れるなら相手の動きを縛る魔法とか使えるよな？」

「使えるけど？」

「即席の作戦だが、まずリリアが親玉が来る場所をピンポイントで特定。アルフが魔法で動きを止め、俺が親玉を“半殺し”にする。魔法とダメージの二重拘束で動けないところをフェイトにジュールシードの封印を直接やってもらおう。それでいいか？」

ほとんど無駄がなく、お手軽な作戦だった。二人は即座に頷いた。それと同時にリリアの声が響く。

《『ターゲット1』接触まで1分きりました。アルフさん、座標イメージを思念通信…念話で送りますね。タイミングも私がお伝えします。》

「分かったよ。」

「私は？」

「俺達の後ろで待機。万が一、拘束する前に封印担当のフェイトが攻撃されるとこまる。」

《みなさん、来ましたよ。アルフさん、10秒後に指定した場所に魔法を。》

「え？どこにいるんだい？」

もう見えてもいい筈なのに親玉が一向に見当たらない。アルフは困惑した。

「いないじゃないk《8、7、6、…》ちょっとリリア？」

そんなアルフを余所にリリアはカウントを続けた。

《3、2、1、0!!!今です!!!》

「ああもうつ!!!【チェーン・バインド!!!】・・・って、ええ!」

リリアの合図に若干疑いと戸惑いを浮かべながらアルフは拘束用の魔法を放った。しかし、リリアに抱いた不安は即座に杞憂に終わった。親玉は本当に現れた。“上から”。。。着地地点とそのタイミングをリリアは完全に予測していた。そしてそのリリアの合図により放たれたアルフの魔法ま完璧に決まった。しかし、親玉の図体は伊達ではないらしく、無理矢理振りほどこうとしていた。

「ヤバイ!!!このままじゃ、強引に解除されちまうよ!!!」



「そのために俺がスタンバイしてんだよ。」

そんな光景を尻目にフィーアは素早く、尚且つ柔らかく自分の剣を目前で振るう。すると剣が振るわれるたび光の線が引かれた。それを巧みに操り、みるみる内にフィーアは剣で光輝く魔法陣を絵描き、完成させた。そして……。

「……魔剣ヴィルガロム、魔銃モード。」

そう唱えた瞬間、フィーアの剣が黒い煙のようになったと思ったら即座に再度集合し、形を作った。ただ、フィーアの右手には剣では無く、普通のよりごつくて銃身が長い黒い拳銃が握られていた。

「【バスカヴィル・ショット】！！」

黒い銃口から放たれたのは純粹な魔法弾。魔弾はフィーアの描いた魔法陣を通過した途端、その魔力を激増させ10倍以上のサイズに巨大化した。弾丸から砲弾になった魔弾は、アルフの魔法にもがく親玉に無慈悲にも直撃した。凄まじい轟音をたて、爆炎が親玉を包んだ。

《『ターゲット1』の動きが停止しました。…いや、ちょっと待って下さい。『ターゲット1』の反応が消滅していきます!!』》

「マジで！？もしかして加減ミスった・・・！？」

「大丈夫だよファイア。ジュエルシード本体が現れるだけだから。」

フェイトの言葉の通り親玉の姿は消え、そこにはひっくり返った常識的サイズの蜘蛛と、光り輝く蒼い宝玉があった。

「アレが、ジュエルシード・・・。(リリア、こっそりデータとつとけ)。」

《(了解)》

「手伝ってくれてありがとう、ファイア。あとは私に任せて。」

「おっ。」

そう言いながらフェイトはジュエルシードに向かっていく。そして・・・。

「ジュエルシード、封印！！」

夜の大騒動はようやく終息を迎えた。

第六話（後書き）

やばいです・・・文がまとめられてる気がまったくしないです・・・

## 第七話（前書き）

ちよつと無理やり過ぎた…？

## 第七話

ファイア side

ほとんど化物退治になった魔力反応物：もといジュエルシード封印作業。その決着がつき、ようやく三人は一息ついていた。しかし、ファイアはフェイトたちと休みながらも思考にふけていた。

(このジュエルシードがヤバイ代物なのは解かるが、“この二人のこと”が分からん……。)

このジュエルシードはロストログアと言って早い話、超危険物なのである。そしてこれの始末は先程の説明の通りだと、ファイア自身の見解は置いとくとして、この次元世界の警察組織である時空管理局とやらの役目らしい。百歩譲ってフェイト達が時空管理局に自主的に協力すると言うのなら、こんな若い年齢で危険なことをするのは無理やり納得したかもしれないが……。

「ところでフェイト、それ(ジュエルシード)どうするんだ？時空管理局にでも届けるのか？」

「えっと、その……、それはちょっと……。」

さつきから時空管理局のこととなると歯切れが悪くなるこの二人。まあ、最初の方で管理局と会いたくないみたいなきことを言ってたから薄々勘付いているが、フェイト達は管理局から見たら犯罪者予備軍、もしくは犯罪者になることをしているのかもしれない。だが、解せない。さつきからフェイトもアルフも無関係な人を極力巻き込まないようにしながら立ち回っている。そんな二人が自分自身悪いと思っっていることを自ら進んでやるとは思えなかった。

「じゃあ、なんでこんなことしてるんだ？」

「それも言えない……。」

話が進まねえ……。あ、そうだ（ニヤリ）。

「じゃあ、質問を変えるわ。時空管理局の常識は誰に教えてもらった？」

「?……母さんにとリニスに。」

「（誰だリニスって…ま、いいか。）管理局に関わるなつったのもフェイトの母さんとリニス？」

「母さんだよ。それがどうかしたの…?」

「フェイト…お前、その母さんにジュエルシード（それ）探して来  
いって言われたんだろ?」

「ッ!?!」

凶星か……。世界の法律である時空管理局のこととそれに反する  
行為を促すなんて矛盾を仕込むことは、このジュエルシードに  
フェイトを関わらすためのことに他ならない。ということはつまり、  
フェイト達にそのことを教えた者も当然関係者である。そして、フ  
ェイト達は自らこんな真似はしない筈。そこからフェイトの母親が  
指示したと推測した。

「と、いうわけだ。」

「……ファイアの言う通りだよ。私達は母さんに言われてジュエ  
ルシードを集めているんだ…。」

視界の端で、急な展開についていけずにアルフがオロオロしていた  
のは無視するとして…やはり、そうだったか。それにしても、こん  
な取り扱い要注意の危険物を集めてどうする気なんだフェイトの母  
親は? ……ん?、今なんて言った? ……“集めている”だと…  
…?



「ちょっと待てフェイト、集めているってことはまさかジュエルシードってこの一個だけじゃないのか!？」

「え？そつだよ。ジュエルシードは全部で21個あるんだよ？」

「ハア!？」

1個でもそつとうやバイのに全部で21個だと!？お前ら俺の胃袋によつぽど穴空けたいらしいなオイ!!

「もう、目的とかどうでもいいや……。一応確認するけど、とりあえずフェイトとアルフはジュエルシードを全部封印して持ち帰るんであつて、暴走させて世界を滅ぼすわけじゃ無いんだな？」

「当たり前だよ!！」

なら一安心だ…。フェイトの母親が何考えているのか不安だが、フェイトに集めろつて言ったからにはそれなりの数が揃うまでは平気だろう…。それまでに色々対策考えておくか…。だが今はとりえず…。

「俺もジュエルシード集めに協力させてもらつて。」

「え!?!」

「もう今更無関係とは言わせねえぞ? だいたい、自分が今いるこの世界が滅ぶ可能性があるのにそれをほっとけるわけないだろ?」

《そもそも軍人の我々が人命に関わること無視できるわけないですよ?》

「リリアまで……。」

「フェイト、フィーアたちに手伝ってもらってこんなことささと終わらせようよ。」

ほんの少し考えたが結局……。

「分かった……。改めてよろしくフィーア。そして、ありがとう……。」

「なに、礼には及ばないさ。アルフもよろしくな。」

「ああ!?! よろしく頼むよフィーア!?!」

「……こうして三人は、しばらく行動を共にすることが決まった。だが三人はまだ知らない。この出会いがその後大きな波乱を呼ぶことを……。」

「オマケ」

「ところでフィーア、アンタずっとその格好なのかい？」

アルフはそのままだが、フェイトはバリアジャケットを解除して私服になっている。しかし、フィーアはこっちに来た時と同様、黒い軍服のままである。

《この世界の常識の検索結果から考えると、今のフィーアの格好はイタイ人です。》

「それはイヤだな……。よし、【服装換装】。」

《了解》

するとフィーアの軍服がその形を変え始めた。帽子と上着は一体化

してフード付ジャンパーに、ズボンはジーパンになり今風の服装に変わっていた。フェイトとアルフは呆然としていた。なぜならフェイトのバリアジャケットのように魔力を一切感じなかったのである。つまり……。

「ファイア…もしかして今の魔法使っていないの…?。」

「ん?これうち(連邦)の科学技術。」

《こんな一般市民でも持ってますよ?》

「す、すごいんだねファイアの世界って……。」

魔法を使わず魔法染みたことをするファイアの世界にただ驚愕するしかない二人であった。

## 第七話（後書き）

感想、指摘お待ちしております。

## 第八話（前書き）

またタイトル変えようかなあ…？

## 第八話

???side

気づいたら周りの全てが真っ黒だった・・・否、床は赤い、いや紅い・・・。辺りを見回すと、ポツンと白色の何かが目に入った。体が思うように動かなかったが、どうにかその白い何かが分かったところまで這って近づくことができた。その白い何かは銀髪、ではなく完全に色が抜けた感じのする白髪の少女だった。顔を見るとその表情は悲しみ、絶望、後悔、懺悔など全て負の感情で染められていた。同時に、この少女を自分は知っている気がした。だが、そんな考えを忘れさせる光景が目に入った。

この空間の紅を創りだしてるモノ・・・血だらけの“かつての自分”がいた・・・。

不意に視線を戻すと少女はこちらを見つめており、そして“今の自分”に問いかけた・・・。

イマノアナタハダレナノ？

俺は…いや“僕”はその少女の問いに何も返そうとはしなかった…。

ファイア side

「……こつち来て見た最初の夢がこれかよ…。」

起床時刻は朝の6時。今、ファイアはフェイト達と同じマンションの一室にいる。昨日の騒動のあと、拠点どころか寝床も無いのを出し、野宿でもしようとしたらフェイトに招かれたのである。見知らぬ男をかんたんに家に泊めちゃダメ！！とアルフと二人で諭そうとしたのだが、

「ファイアはもう知り合いでしょ？」

そういう問題じゃねえ！！という感じの返答をされた。その後何度か説得を試みたが結局ファイアとアルフが先に折れた。いくら協力



関係とはいえ、いつまでも少女と同居する気はないので一日だけという条件で。

「二人はまだ寝てるな…。よし、金作りに行くか。」

異世界から来たフィアは実質無一文である。そのため、しばらくここで生活するにはやっぱりこの世界の通貨が必要であったが、自分より年下のフェイト達に金をもらうなんて選択肢は自分には無い。別に軍人であるフィアはその気になればサバイバル生活を送れる。だが、彼が所属していた『ベルフィア軍心得十カ条』にこんなものがある。

未開の地で生き延びる根性と生活する知恵をつけるべし。

要はサバイバル能力も必要だが、異国の文明にすんなり馴染む技能も必要であるということ。自分が滞在する未開の土地の人間は敵にも味方にもなる。故に相手側を理解し、可能なら味方にするだけの手腕を身につけるようにしろという意味がある。もともと、フィアはそこまで忠実にこの心得に従ってはいない……。

「それにしても…、また“あの時”の夢を見るとはな…。」

今朝、自分が見た夢を思い出し思考にふける。あの夢は自分にとって忘れない…、いっそ否定したい過去であるが、同時に“今の自分”

を存在させている過去である。故に、否定すれば自分とこれまで自分に関わったものまで否定することになる。だから今までこのことは極力考えないようにしてきたのだが…

「まさかコレに関係することが近々起きるってか？・・・いや起りようがないか・・・。」

考え事をそのへんで中断し、流石に無断で消えるとマズイのでフェイトとアルフ宛に『少し出掛ける』という内容のメモを書いた。

「んじゃ、行ってきます。」

まだ寝てるであろう二人を起こさないように、フィーアは静かに家を出た。ベランダから…。とんでもない高さから跳び降りたにも関わらず、フィーアは綺麗に、静かに着地した。そして、自分にしか聞こえない程度の小さな声で呟いた…。

「俺は僕だよ」・・・エルミア・・・。」

夢で逢った白髪の少女、かつての初恋相手の問いかけにそう答えた・・・。



## 第八話（後書き）

今後の伏線にするつもりのフィーアの過去

## 第九話（前書き）

フィーアが心得に忠実じゃ無いとはこつこつと……

## 第九話

不運な人 A    s i d e

今、俺は海鳴市のとある競馬場に相方と来ていた…ズタボロにされ、恐ろしい青年に引きずられながら…。

「オラツ、いい加減起きやがれ!!」

「ひいっ!! しません!!」

微塵も抵抗する気が湧かなかった…朝っぱらから狩場であるいつもの路地裏に優男がやってきて、いいカモが来た!! いつものように二人でカツアゲしようとしたのだが…三途の川を渡りかけた…。この優男はカモどころか怪物だった。二人してボッコボコに返り討ちに合い、気絶させられ、気づいたらここにいた。コイツ俺たちをどうする気なんだ!?

ファイア s i d e

( やっぱりどこの世界にもこういう輩ってのはいるもんだな。 )

(《全世界共通ってやつですね》)

フィーアはリリアと談笑しながら正座している二人の哀れな力毛達を見下ろしていた。フィーアはあえてヒト気のない路地裏に行ったのである。自分から襲ったら負い目を感じるし、なにより犯罪である。だが、犯罪者を撃退するのであれば話は別だ。自業自得な上に警察に「カツアゲしようとして返り討ちに逢いました」なんて本人たちも言えるわけない。ということで、フィーアは路地裏へ力毛狩りに向かったわけである。

(《それにしてもえげつなかったですね…》)

(すぐに気絶させたらどんな目に逢ったか相手が理解できないだろ?)

フィーアはチンピラ二人を気絶するギリギリ手前をキープしながら痛めつけたのである。その甲斐(?)あつてか二人は従順な態度になっていた。

「おい、てめえら・・・財布出しな・・・。」

「ハ、ハイ!!」

なんの躊躇もなく財布を差し出す二人。

「よし…そこで一時間待ってる、もし待ってなかったら……後悔するぞ…?」

「一生待ち続けます!!」

そう言っただけでフィアは競馬場に入ってしまった。

（きっかり一時間後）

ご機嫌な表情をしてフィアは帰ってきた。そして…。

「ちゃんと待ってたか…手え出せ。」

「ハイ…」

なんとチンピラの財布を返した。なにかしらケジメ（追い打ち）



けさせられると思っていたのでいきなりすることに二人は困惑していた。

「金額は足りてるよな？」

「そ、そうですね…なんで…？」

「お前らは俺に絡んで金をふんだくろうとした、俺は半ば恐喝してお前から金を借りた。だが、お前らはほとんど未遂だし、俺がこっぴどく金返せばお互い何も無かったことにできるだろう？…怪我の治療代も足しといたからな一応…。」

自分から絡まれに行ったことは棚に上げてそうチンピラ達を諭す。もともと、チンピラ狩りで金稼ぎする気は無く、本命はこの競馬である。軍隊生活で培った洞察力を無駄にフル活用し、強い馬と強い騎手を見分けてボロ儲けするのが本来の目的で、もうそれなりに稼いだのでこいつらと縁を切れれば万事丸く収まって帰れるというわけである。

二人は顔を見合せ、考えたあげくフィアアの誘いに乗ることにしたようだ。

「へへっ、じゃあそうさせていただきやす。今日はお互い何もなかったというこどで…。」

許されたことをいいことに早速調子が戻り始めた二人にファイアは少しイラツとした。罪悪感を減らすためこういう輩を選んだとはいえ、やっぱり腹が立つ。おもむろにそばにあつた手のひらにギリギリ収まる石を拾う。

「一ついいかな？」

「？、なんすか？」

石を手で遊ばせながらこう言った。

「別にお前らが俺の知らない所で知らない奴に何しようがどうでもいい……。が、迷惑かけた奴の中に一人でも俺の仲間とその身内が混ざっていたら……。」

バキヤアツ！！

「……潰すぞ？」

手のひらサイズの石が瞬時に片手で握り潰され、粉碎された。その光景を見て二人は自分達の体が粉々にされるのを想像して顔を真っ青にした。そして、

「二度とこんな真似いたしません!!」

二人はそう言い残し、脱兎のごとく逃げるように去って行った。

「流石にこれで懲りたろう。ふ、若者の未来を正してやったぜ…。」

《あなたは一切懲りてませんね…。この方法のせいで何回懲罰されたと思ってるんですか…?》

「……教官による折檻は本気で死にかけたな…。」

当たり前のことだが、相手の自業自得であるものの故意にやっているので当然許される方法では無い。上官にバレタときフィーアは地獄を見るハメになり、さらに賭博の一切を禁止された。

「まあ、これだけ稼いだからもうやる気はないよ…。(博打は解禁するけど…)。さて、マンションの部屋借りる金も当分の生活費も手に入ったし、買い物して一回帰るか…。」

特に食料品…。あの二人、ロクなもの食ってないからなあ…。昨日見たがフェイトはインスタントや冷凍食品、アルフにいたっちゃド

ツグフードだなんて…。おいしいものを食べるありがたい状況を無駄にするあいつらには絶食訓練を受けた者として一言言わなきゃ気が済まん！！

「連邦政府軍一の調理兵（自称）の実力を見せてやるぜえええええええ！！」  
ぬッ！？

《南東数キロ先に魔力反応確認！！ジュエルシードです！！》

ちっ、せっかくやる気出したってのに買い物どころじゃ無くなった…。しかも…、

「おいリリア、魔道士の気配もするんだが？」

《お察しの通りフェイトさんとは別の魔道士の反応を1名、いや2名確認できます。》

管理局員かもしれないな…まだ何も対策考えて無いから、今回は無理してまで行くのはやめところかな？なんて思ってたら、

《フェイトさん達がジュエルシードのもとへ急行した模様です。》

「…行くしかねえか。」

フェイト達だけに任せて傍観するのが一番楽で安全なんだろうけど…  
…どうしても性に合わないだよ、そういうの…。

《やっぱりお人好しですね。》

「我ながら難儀な性格だと思うよ…。いつも迷惑掛ける…。」

《お気になさらず。この迷惑が無くなったら、あなたについてく気も無くなりますから。》

「ハハツ…。さて、行くか。」

言うや否や、フィーアはジュエルシールドの元へ走りだした。

???side

「またか…。」

とあるケーキ屋で、二十代後半のグレーの髪で緑色の目をした男は  
そう呟き、溜息を吐いた。昨夜から無視できない大きさの魔力反応  
を何度か感じていた。おかげで昨日から口々に眠れていなかったが、  
自分のことはぶっちゃけどうでもいい。しかし…、

「どうしたん？溜息ついて。」

「いや、なんでもない。」

万が一にでも、この子が巻き込まれる様な事になるのは断じて許せ  
ん。素性の分からぬ、異界の住人である自分を家族として認め、扱  
ってくれる優しいこの子にこれ以上悲しみを与えると言つのなら…  
たとえ神であろうとこの手で葬ってくれる…。

「ふうん、まあええか。それにしても、ここのケーキほんまおいし  
いなあ。」

「ああ、本当だな。」

車椅子の少女と談笑しながら男はこの厄介事に介入する決意をした。  
まさか自分の同類と逢うことになるとは知らず…。

第九話（後書き）

はやての口調が分かんねええええええ!!

## 第十話（前書き）

なのは好きの人、ごめんなさい……。作者はアンチじゃないので段々待遇はよくするつもりです。



## 第十話

なのは s i d e

はじめまして、高町なのはです。訳あってユーノ君とジュエルシンドを集めるため魔法少女やってます。今日、私は友達のアリサちゃんと一緒に同じく友達のスズカちゃんのお家に遊びに来ていました。けど、突然ジュエルシンドの反応がしたから途中抜け出してまで封印に向かったら、

「あれは…まさか僕と同じ世界から来た魔導士!？」

ユーノ君が言ったように、私と同じくらいの金色の髪をした女の子の魔導士が現れ、手早くジュエルシンドの封印を行った。そして、

「申し訳ないけど、いただいでいきます。」

いや否や襲いかかってきた。私はそれを迎え討とうとしたのだけだ…。

「そおおおおおい!?!」

「じゃあああああああああああ!?!」

「なのはあああ!?!」

後ろから気配がしたと思ったら誰かに掴まれて、おもいつきり空高く投げ飛ばされたの…。

一体何がどうなってるの？

フエイトside

私はただ驚いた。ジュエルシードの反応を辿ってきてみれば、ジュエルシードで大きくなった猫がいたし、自分以外の魔導士がいて少しびっくりした。でも、それはまだいい…一番びっくりしたのは…。

「そおおおおおい!?!」

「じゃあああああああああああ!?!」

(何してるのファイア!?)

どこから持ってきたのか、フルフェイスのヘルメットを被ったファイアがいきなりやってきて白の魔導士を空高く放り投げた。白の魔導士の子は猫みたいな声を出しながら空を舞った…遠心力で…。

「よおフェイト、俺だオレオレ。」

《詐欺ではありませんよ》

「いや、分かってるけどなんであんなことを…?」

とにかく聞かなきゃ色々という意味が分からない。

「おい!!お前たち、なのはに何するんだ!!」

「うおっ、ただの獣じゃねえのか。」

《もう一人の魔導士反応は彼のようです。》

「魔法生物ではなく魔導士なんだな?コレ。」

「わっ!!やめる離せ!!」

喋るイタチみたいな生き物を引つ掴みながらフィーアは念話で話しかけてきた、

(フェイト、こいつらは管理局の奴らなのか?)

(…ううん、違うみたい。もしそうだったら局員は名乗るらしいよ?)

(なんだよ、こんなの被らなくてもよかったのかよ。)

あ、管理局に顔を見られないようにするためにヘルメットをかぶって来たんだ…。

(そういえば、なんであの子投げ飛ばしたの?)

(敵か味方が分からないからギリギリ冗談ですむレベルで攻撃してみた。場合によっては協力関係を作りたい。人手は多い方がいいだろ?因みにアルフは先に帰ってもらった。)

あいつ、気が短いから交渉無理だろ…と、つけくわえてそう説明してくれた。フィアって、ふざけてるようで一応ちゃんと考えてるんだ。自分だけじゃこの二人に手伝わってもらうなんて考えもしなかった…。

「今失礼なこと考えたな？」

「そ、そんなことないよ？」

「…そういうことにしといてやるよ。さてと、あの子、なのはだっけ？フェイトと同じ魔導士ならそろそろ自力で飛行して戻ってくるだろ。その時にお互いの話をしようじゃないかイタチ君。」

「ぼくはイタチじゃない、ユーノだ…！」

なんて喋ってたら…

「やああああああああああっ！…！」

びたーーーーん…！！

白の魔導士の女の子が戻ってきた…。いや、降ってきた…。あれ？あの子私と同じで魔導士なんだよね？

「…あの子、飛べないの？」

「なのはは魔導士になってまだ日が浅いんだよ！…いきなりあんなことされて冷静でいられるわけじゃないか！…」

「…ファイア？」

《…ファイア？》

「…THE DOGEZA!!」

バリアジャケットで無傷ながらも目がグルグル状態の白い魔導士の女の子、パニック状態のイタチもどき、ジャンピング土下座するファイア。なんだろうこの状況…。

結局、なのはが目を覚ます前に一般人の気配アリスとすずかが近づいてきたので、ロクに話しあうこともできずにその場を去るしか無かった…。因みに、ちやっかりジュエルシードは頂いてきた。

《さて、称号はどれにします？愚者、間抜け、役立たず、カス、それとも能なし？》

「…すまん。」

「ア、アハハ…。」

この時、なのはがフィアと再会したあかつきには“お話”ではなく“O H A N A S I”することを心に固く誓っていたことをフィアは知るよしも無かった…。

「絶対なの!!」

## 第十一話(前書き)

今回オリキャラ二号の名前出します



## 第十一話

ファイア side

「温泉？」

「うん、さっきのくじ引きで貰えたんだ。」

先ほどの白い魔導士のことは、今日はもう忘れて三人で商店街へ買い物に行き、今はその帰りである。そして、別行動中にフェイトはくじ引きに挑戦し日帰りの温泉旅行のチケットを手に入れたようである。

「ほほう、そりゃいいや。行くつじゃないか。」

「え、でもジュエルシードが…。」

「今だってフェイトのサーチャーと俺の使い魔で探査してるのに全然見つからねえじゃん。」

先日からフェイトはサーチャーをとばし、ファイアは鴉のような使

い魔を大量に飛ばしジュエルシードを探しているのだが一向に反応が無いのである。

「あれって多分、軽く暴走しないとただの石ころと区別つかないんじゃないのか？ だったら、時がくるまでノンビリする方が後々ためになるってもんだ。それに最悪の場合、俺の使い魔がどうにかするさ。」

「アタシもそう思うよ。なあフェイト、今までロクに休んでなかったんだからたまにはさあ…。」

その言葉を聴いてニヤリとするフィーア。段々分かってきたが何事も控えめで遠慮気味のフェイトは自分とアルフが二人で言うとは大抵…。

「分かった、そうするよ。」

首を縦に振るのだ。フィーアとアルフは視線を合わせ。

( (グッジョブー!) )

と、互いにアイコンタクトして心の中でサムズアップするのだった。まだ出会って一日たらずだが、三人ともすっかり馴染んできたよう

である。

「んじゃ、今日はさっさと帰るか。」

「あれ？夕飯の買い物は？」

「お前は即席ラーメンとレトルト以外は食い物と認識しないのか…？」

そう言っただけで買った食材達を見せる。

「だって私もアルフも作れないんだもん…。」

《女の子なんだからちゃんとしたもの食べなさい。お肌にも悪いですよ。》

唐突に会話にログインしてきたリア。一応女性なのでやっぱりこの手の話は黙ってられなかったらしい。昨晚も二人の夕食風景を見て俺と同じく何か言いたげだったが、初日から居候の身でモノ申すは流石に自重したらしい。

「お前はオカンか…？」

《あなたみたいな馬鹿とずっといたらイヤでもこうなります。》

「…ごめんなさい。」

「フィーアとリリアってやっぱり仲がいいね。」

《もう十年くらいの付き合いになりますね。》

もうそんなに経ったのか…そっぴや訓練兵のときからずっと一緒だったな…。

「…私たちもずっと一緒にいようね、アルフ。」

「当たり前さ、フェイト。」

自分たちを見て改めて絆を確かめ合う二人。微笑ましい光景にフィーアは少し笑顔を浮かべ、

「さて、帰ろうか。」

「うん!」「」

三人は仲良く歩いて帰路についた。

みらい side

「温泉?」

知ってか知らずか、グレーの髪に緑の目をした男『八神みらい』は  
フィアとまったく同じ言葉を居候中の家の主である『八神はやて』  
に発していた。

「そうなんよ。今日、魚屋のおっちゃんが『手に入れたはいいけど  
孫は遊園地に行きたいらしいから…』て言ってくれたんよ。行か  
へんか?」

「そうだな。基本的に暇だし、アリアでも誘って行くとするか…。  
ムッ!!来たあああああ!!」

「ほ、ほんまか！？ガンバレみらいさああん！！」

今この二人は椅子と車椅子に座りながら釣り竿をたらししていた…家のリビングで光輝く魔法陣に…。

「こ、こ、これはかなりの大物だぞ！！はやて、代われ！！俺は銚を出す！！」

「ええ！？」

「大丈夫だ！！この竿、クジラも釣れるくらい魔法で強化してあるから！！」

「わ、分かった！！私に任せときい！！」

即座に釣り竿を手渡されるはやて。みらいは別の魔法陣から銚を取り出し、そして…。

「チエエエエエエエエスウウウトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
！！！」

ズドオオオオン！！

凄まじい突きを、釣り竿にかかった獲物がいるであろう日本の遠洋に接続された魔法陣に叩き込んだ。その余波で八神家が一瞬揺れた…。そして、

「獲ったどおおおおお！！」

「釣ったどおおおおお！！」

八神家のリビングにはやての身長より大きなマグロが釣り上げられた。

「ふっふっふ、この『どこでもフィッシング魔法陣』を開発すること早三ヶ月…長い道のりだった…待たせて悪かったな、はやて…。」

「そんなことあらへんよ。ありがとうなみらいさん、私の我儘きいてもらって…。」

以前、はやてがテレビに繋げて遊ぶ釣りゲームをほしそうにしていたので『もつとすごい作るからちよつと待ってる』と言ったのだが徹底的（特に安全面）に制作していたら思いのほか時間がかかってしまった…。

「よっしゃあ!! 気合いれて料理するでえ!!」

「待てえい!! 半分は魚屋のおじさんに引き取ってもらったからな!？」

「そんなん関係あらへん!! 目の前にある食材は全て私が屠る!! それが八神クオリティ!!」

「どうやってできたそんなクオリティ!？」

「『目の前の敵は全て我が屠る!! それが我、ラインベルトなり!』を参考にしました。」

「俺のセリフじゃねえかああああああ!!」

「あはははは。」

自分がはやてのために言った言葉が原因であったことを知り『八神みらい』、もとい次元漂流者『ミランダル・ラインベルト』は頭を抱えた。それを見てはやては笑う。そして、頭を抱えながらも『ミランダル』…いや、『みらい』はそんなはやてを見て同じように笑



顔を浮かべる。そのやり取りは、年の離れた兄妹にも、年の近い親子にも見えた。

今の八神家に、今の八神はやてに、悲しみと涙はもう存在していなかった。彼女はもう、孤独では無くなったのだから…。

## 第十一話（後書き）

みらい（ミランダ）が誘うと言った相手、アリアは猫姉妹の……。  
すでにみらいは原作壊し始めてます……。ですが、彼はまだ闇の書と  
はやての関係を知りません……。

## プロフィール2

名前 八神みらい（命名者・八神はやて）

本名 ミランダル・ラインベルト

年齢 26歳

職業 とある世界の元近衛銃士。現在魔法をフル活用して野菜の栽培、最近は漁業も始めた。

容姿 身長はフィータと大差無し。グレーの髪、緑色の瞳。イケメンの分類に入るが若干老け顔…。

性格 いたって真面目な性格だったが、はやてと過ごすうちに大分丸くなった。

戦術 銃剣と魔法。みらいの銃剣はボルトアクション式なのだが…  
そう遠く無い日に一部の魔導士を驚愕させる。

みらいはフィータより二年早く海鳴市に漂流してきており、それからずっと八神家に居候中。はやてとご近所公認の正式な八神家の一員になっている。

## プロフィール2 (後書き)

こいつをベースに主人公作りやよかったかなあ…でもフィニアの未使用設定がまだまだあるし…。みなさま、できれば意見を下さい…。

第十二話（前書き）

使い捨ての三号

## 第十二話

ファイア side

「それじゃあ俺はマンションの管理人さんに部屋貸してもらおうよう話してくるわ。」

「ファイア行っちゃうの…?」

そんな上目使いやめてくれフェイト…なぜか身に覚えの無い罪悪感が沸くから…。今俺達はフェイト達のマンションの一階、正面入り口にいる。俺がある程度金を稼いだので（方法は伏せた）居候は今日でやめるといふ話をしたのだが…何故かそれをフェイトが嫌がるのである。

「…あゝ、あれだ、その…いきなり今日借りれるわけじゃないから、もう一日だけ厄介になるよ。」

「明日になったらいなくなっちゃうの…?」

どないせえいうねん!?

《大丈夫ですよフェイトさん。フィアが来ないならあなたから行ってしまえばいいのです。》

「リリア!？」

《何か問題でも?》

「…特に無いです。」

いや、あるんだけどさ。自分で言うのもなんだけど、女の子がこんな怪しい男とずっと同じ部屋に居るってのはどうなの?とか。こんなに男への警戒心薄くて将来大丈夫か?とかさ…。

《大丈夫だ、問題無い。》

「死亡フラグだ馬鹿野郎。」

《だいたい、あなたが女が警戒しなきゃいけない類の男ならとっく  
に上官と教官に殺されてるでしょう?》

「まあ、ね。」

《と、いうわけでフェイトさん。なるべく近くの部屋を借りますのでジュエルシードの件以外でも気軽に来てください。あ、バルディッシュさんも忘れずに連れて来て下さい。また（・・・）色々おしゃべりしたいので。》

「うん、わかった！」

満面の笑顔だよこの子…不覚にも癒された…。会ってまだ一日しか経ってないってのに随分と懐かれたみたいだな俺…。

（ありがとね、フィーア。）

（アルフか。むしろ俺みたいな不審者と仲良くしてくれて礼を言いたいのはこっちだ。）

アルフが念話で話しかけてきた。

（最初は怪しい奴なんて言っただけで悪かったよ。これからもよろしく頼むよ。）

（俺なんかでいいのか？）



(フェイトがあんな表情するのはアタシ以外だとフィーアが初めてだよ。アンタなら信頼できる。)

そこまで言われると満更でもないな…むしろ、嬉しいよ。ならば、それ相応に応えなけりゃな。

(分かった。任せろ。)

(ありがとう。)

んじゃ早速、手始めに料理でも振る舞うとしますか。……おっと、こいつは…。

「なにせよ管理人さんと話すから先に行つて。あとで夕飯作つてやるから冷蔵庫に食材しまつといてくれ。」

「分かった。待ってるから早く来てね。」

「はいよ。さっさと片付けてくるよ。」

そう、「片付けにね」。

??? side

ようやく見つけたぜ、黒服の漂流者…。上の連中は何のつもりか知らないがせつかくの休暇を潰されたんだ、八つ当たりで手足の2、3本へし折っても文句は言わないだろう。それにアイツらがほしいのは漂流者じゃなくて漂流者の持つ技術だ。別に生け捕りにする必要もない。ミッドチルダの人間が近くにいますが、まあ証拠が残らなきゃ何してもいいって言ってたから…。

「あのガキは殺しまえれば問題無いよな？」

封鎖結界を展開すりゃ、あのガキも飛んでくるかもしれないねえが敵にならねえだろう、さくつと殺して終わらせて休暇の続きといこうじゃないか。

「さあて、封鎖結界てんか」

「じゃんばんわ。名も知らぬ誰かさん。」

「っ!？」

気づけば後ろに目的の男、フィアがいた。ただその表情は、割と穏やかな善なに恐ろしいものを感じさせ、尚且つ口調も変わっていた。

「てめえ!!!いつのまに!？」

「君が愚痴をこぼし始めた時かな。」

なんてやろうだ…。これでも俺は同僚の中じゃ隠密行動はトップクラスの實力を持ってるってのに…。まあ、落ち着いて対処すりゃ問題無いはずだ。

「で、“僕”に何の用かな？」

「テメエは俺についてきてもらう。」

さて、どうでる？

「行き先は？」

「言えねえな。ついでに拒否権は無え、イヤだってんなら力ずくだ。」

言葉とともにありつたけの殺気をぶつける。並の人間なら怯えて動けなくなる規模の殺気を…。すると、フィーアは少し考えるような仕草を見せ、一言…。

君は素人かい？

「…ハア？」

コイツ…俺は暗部のエースだぞ！？あの“脳味噌共”の無茶な命令に応えられる数少ない人間なんだぞ！？それを素人呼ばわりだど！？ぶち殺してやる！！

「てめえ、生け捕りはやめだ！！死体にして持ち帰ってやる！！」

「まあ、少し話を聴きな。君の上司か依頼主の目的は僕か僕に関わるものだろ？」

「だからどうした!?!」

御託はいい、とつとと殺らせる…。

「そういう時は嘘でも何でも使って標的の警戒を解くのが先決だ。そうすれば標的も自主的に協力してくれる。そしてあわよくば自分の拠点に連れて行き、より優位な状況を作る。」

「しまったことか!?!」

「次に、接触する前に必ず標的のことは調べておくことだ。特に性格は先程言った警戒を解くための手段に必要な不可欠。言葉を選ぶための参考になる。」

「てめえの講義もどきなんか聴きたくねえんだよ!!俺は「そして、最後に大切なのは標的の実力を見誤らぬこと。」「いい加減にしやがれ!?!」

「自分より格上の相手に決して正面から相対せぬこと。任務を遂行せず死ぬのは愚者の選択だ。さて、ひとつ問おう。」

本気で“僕”を殺せると思ってるのかい？三流風情が

途端、男の体に絶対零度に匹敵する悪寒が走った。先程男が発した殺気など比べるまでもない大規模な殺気がフィーアから放たれていた。男はただ恐怖に震えるしかなかった。

「な、なんなんだお前は！？」

「知る必要は無いよ、君は僕に“片付けられる”のだから。」

そう、この世からね。

「それじゃあ、始めようか。」

黒による殺戮劇が今、始まるうとしていた

第十三話（前書き）

この話いらなかったかも…

## 第十三話

リリア s i d e

私の主兼相棒のフィアに対するタブーが3つある。

- 1、彼の身内を傷つけるような言動。
- 2、自分自身の決めたルールを自分で破って尚且つそれに自覚が無い。
- 3、フィアの過去（悪夢）を思い出させるもの。

2に対しては度合いにもよるが、まあ彼自身たいてい嫌悪感を抱く程度で済む。3は彼に対して一番やってはいけないのだが…今はあまり語れないので割愛する。で、1についてはだがこれは普通の人からしたら誰だつて普通に許せないことだろう。しかし、フィアはこれに関して覚える怒りの限度が無い。特に彼の身内を『殺す』なんて言った日にはその日のうちに殺されかねない。これは3のタブーが関係しているが今回は多くを語るのはやめる。さて、そんなフィアの前で

「あのガキは殺しまえれば問題無いよな？」



なんて言ったらどうなるのか？その答えが目の前にあった。

「う……ぐ……かはっ……」

「どうしたんだい？もう疲れたのかい？」

先程の言葉を吐いてしまった男、今は『名無し』と呼んでいる男が見るも無残な状況で転がっていた。纏っていた戦闘服は血まみれでボロボロ、武器は跡かたも無く粉碎され、両足も砕かれ、左腕はおかしい方向に曲がっていた。右腕にいたっては“無くなっていた”……。

「この程度で戦えなくなるのかい？なんて脆い生き物なんだろうね。」

「……化け物……ぐはっ……！」

「あ、まだ遊べそうだ。」

追撃の蹴りを喰らわす。因みに今のフィアは手ぶらである。というより最初から何も手にしてない。そう、フィアは彼を最初から最後まで“素手で”文字通り、なぶり殺しにしているのだ。もう『

名無し』に戦闘意欲は微塵も残って無かった。

「さて、もう少し遊びたいけど、あの二人をあまり待たせたくないから用件をすませようか。」

「な…なん…だ…?」

“お前”の所属か依頼主を“俺”に教える。

『君』が『お前』に、『僕』が『俺』に戻ったことに少し安心する。ようやく、落ち着きが戻ったようだ。場合によっては“発狂”する前に鎮静剤を打つつもりだったが…もうその必要はないようだ。

「い…言えねえ…言おうとしたら…死ぬよう…に細工され…てる…。」

「しょうがねえな…因みに、俺の正体の目星ついてんのか?」

「た…だの…次元…漂流者と…しか…。」

『次元漂流者』という言葉を使いましたか。ということは…。

《ミッドチルダの人間ですね。》

「管理局員か？法の番人にしては素行が悪すぎだな…。裏仕事の人問ってところか。」

《どちらにせよ、コイツはどうします？》

「そうだな……。せええええい！！」

ズドムツ！！

「ぐあああああああああああああああつ！！……………」  
「(がくつ)。(」

「お前はもう(魔導士として)死んでいる。(キリツ)「

指で名無しの胸部の中央あたりを指でおもいつきり突いた。そこには魔法を使う者のほぼ全員が持つといわれる秘孔があり、そこを突かれた人間はもう一度そこを同じように突かないと魔法が使えなくなるのだ。

「これで、ただの人間として警察に引き渡して万事解決。」

《解決しません。これからどうする気ですか？管理局と2日目から接触しちゃって…。》

「大丈夫だろ。さっきも言ったがこいつは十中八九裏の人間だ。そして多分ベルフィーア連邦のことは知らないだろう。」

《何故です？》

「何もかも雑すぎるんだよ。俺の戦闘能力を知らない、俺の素性も知らない、にも関わらず俺を捕まえにきた人数は雑魚が一人…。連邦の未知の技術、俺自身を最初から狙ったにしては随分と準備がお粗末だ。いくら急に正体不明の人間がこの世界に現れたからってもう少し何かしら準備するもんだろ？」

《そうですね…。つまり、あなたはコイツらに対してのイレギュラーな存在だとも？》

「多分そうだ。おそらく本命は俺じゃあ無い。俺がそこに急に現れたから慌てて対処してきたんだろ。しかも裏の人間が来たってことは、その本命は奴らが表沙汰にできない何かだ…。心当たりはあるけど…。当分は様子見になるが、管理局全体が敵にまわるのはまだ先の話になるはずだ。」

《結局その裏の人間どもはどうしますか？》

「無視だ。流石にこつちから積極的に行ったら奴らに表の人間を使う大義名分を与えかねない。まあ、襲ってきたら正当防衛は続けるけどな…。」

ほんと考えてないようですね、この人は…やらかしたあとに考えてる可能性もありますが、結局いつも万事解決しますからあまり文句も言えないんですね…。

「…おい、フェイトに続いてお前まで何か失礼なこと考えてるだろう？」

《そんなことないですよ。早くコイツを片付けて帰りましょう。》

「話逸らしたな…？いいや、とにかくそうし…あれ？」

動けなかった筈の名無しがその場から消えていた。

《ワープ反応確認。魔法による転移とみられます。》

「秘孔突いたから魔法は使えないはず…。道具でも持ってたのか？」

《まあ、連れて帰る気はありませんでしたからいいのでは？》

「それもそうだな…。おっと、時間掛け過ぎたな。部屋借りる相談は明日にするか。」

フィーアは夕飯を作るため、フェイト達のもとに帰っていった。そこに先程の魔獣のような雰囲気は一切無く、いつもの明るい彼に戻っていた。

尚、リリアの管理局による更なる襲撃に関する心配は、間接的に2年前の『八神みらい』の手により杞憂に終わる。

## 第十四話（前書き）

今回オリキャラ二人は直接は出ません…

## 第十四話

（ミッドチルダ某所）

（定時連絡）

先日出現した二人目のイレギュラーの報告。以後、この二人目を『魔獣』と呼称。

緊急報告により、休暇中だった隊員番号67番が接触、交渉、交戦。交戦の結果デバイスの全壊、全身打撲、両足骨折、左腕の骨折、右腕の損失、リンカ コア損傷。

67番は隊員として使い物にならないため、サンプルとしてJ・S氏に送りつけるものとする。

被害は闇の書のもとに出現した一人目のイレギュラー通称『魔人』のものを加えると、28人に昇る。

これ以上の『魔獣』との接触は『魔人』による被害の二の舞になる恐れがある。故に『魔人』同様、今後『魔獣』に対してはギリギリまで監視でとどめておくことを進言する。

管理局暗躍機動部隊隊長 ノー・ネーム二佐

「こんなもんか…。」

薄暗い部屋で映像端末を再生しながら報告書を制作している男、



ネーム二佐』は呟いた。そしてチラリと再生中の映像に目をやる。そこには二人目の漂流者、『魔獣』と隊員番号67番の戦闘記録映像が流れていた。

咄嗟に隊員がデバイスを出し、攻撃をしかけようとしたらしいのだがデバイスを相手に向ける前に間合を一瞬で詰められ、腰に捻りを加えた鋭い蹴りが一撃で隊員のデバイスを粉碎した。隊員は驚愕と恐怖の表情を浮かべ、慌てて後ろに下がろうとするも『魔獣』はそれを許さず、彼の左腕を捕まえそのまま間接を決めながらへし折った。絶叫する隊員に一切の慈悲も与えず、『魔獣』は最初にデバイスを粉碎したあの蹴りを彼の右腕に放とうとしていた。そして…。

『ぐあああああああああああああ（ブツッ）』

「…この映像も送つとくか。」

ネーム二佐は途中で映像を再生するのをやめた。映像でとんでもない状態にされていた隊員番号67番だったが、緊急転移で帰還した彼はもつと酷い状態だった。つまり、右腕を飛ばされた後もまだこの暴虐が続くのだ。別に隊員に同情してるわけではない。ネームの憂鬱の原因は、

「『魔人』とほぼ互角の可能性がでてきたな…。」

2年前、計画のために選んだ第97管理外世界に悪名高き口ストロギア『闇の書』が存在していることが分かり、計画の邪魔にならぬよう秘密裏に持ち主ごと処分しようとしたが：散々な結果になった…。『闇の書の主』の家に次元漂流者が居候していたのだ。本局の人間がソイツを保護しにきてしまった場合、当然『闇の書』の存在も同時に知られ増援が来るだろう。表の人間に来られると計画に支障が出かねない。よって、漂流者も抹殺対象になったのだが：この漂流者が恐ろしく強かったのだ。

「まさか暗部の人間が27人、全員使い物にならなくなるとは…。」

最初に1人が抹殺に向かい、振り返ちに逢った。次に腕の立つ隊員を1名送ってまた振り返り討ち。1人がダメなら3人で行かせても振り返り討ち。その後も何度か試みたが失敗。なら暗殺だ、とトラップ専門の隊員を向かわせたら未知のマジック・トラップにかかり振り返り討ち。未知の魔法技術を確認し、なおのこと引けなくなりついには12人で交戦したが結局振り返り討ち。気づいたら他の任務に支障が出る程、隊員の数が減っていた…。

管理局の万年人手不足の影響はこの暗部とて例外では無い。ましてこの部隊は仕事柄、“表”の名のある実力者をヘッドハンティングできないので“表”のハグレ者やゴロツキで構成されている。アラシクなんて片手で数えられる程度しかない。故に一人目の漂流者、通称『魔人』に手を出すのは断念した。

「幸い、こちらから出向かなきゃ何もしてこないようだ…触らぬ神に祟りなしってか…。しかし、こっちの神にはいずれ触らねばならぬのか…。」

『魔人』の扱いが決まって一段落し計画が本格的にスタートした瞬間に奴、『魔獣』が現れたのである。しかもまた居候、さらに今度は計画の重要人物の家。悪い冗談にも程があるだろう…。即抹殺を試みたがあのザマである。『魔人』と同等ならばこちらの被害もまたしかりだ…。早々に抹殺は保留することにした。当分は『魔獣』をうまく計画の歯車に加える方針になることだろう…。

「“脳味噌共”に文句を言われたくないので、これ以上余所者に邪魔されたくないのだがね…。失われた都、『アルハザード』への道を…。」

唐突に自室の扉がノックされ、扉が開き部下が入ってきた。

「失礼します。ネーム二佐、報告書を受け取りに参りました。」

「御苦勞。ついでに現地の人間に通達しろ、『魔獣は監視で留め、人形遊びの魔女を踊らせ続ける』とな。」

「了解。」

せいぜい我々の手のひらで踊り続けるがいい…哀れな『プレシア・  
テストロツサ』

「さて、次の書類は…。」

光に紛れし闇が、邪な笑みを浮かべていた

第十四話（後書き）

八神みらいのスコア。迎撃戦17、トラップ4。

リーゼ姉妹のスコア。遭遇線6。

合計27名

第十五話（前書き）

温泉は次回



「アタシはドッグフード。」

「退場！！（怒）」

こいつらは……。ていうか一体どんな教育してやがったんだ、フェイトの母親とリニスとか言う教育係は……。一度しつかり『O H A N A S I』したほうがいいかもしれん……。

「しかたねえ、『黒羽』を使うか……。」

《お、こっちの世界に来てついに初使用ですね。》

「「??.」」

おもむろに左手を掲げたフィーアが何をするのか分からず、二人は不思議そうな顔をした。

「【出でよ黒羽】」

フィーアがそう唱えた瞬間、彼の左手に無数の黒い羽根のようなものが出現した。少しの間羽根は舞い踊るように漂っていたが、フィ



「アが手を軽く振ると一か所に集まり形を作り始めた。そして…。

「完成。」

黒い羽根は見事な新品同様のフライパンになった。

《相変わらず完璧ですね。》

「当たり前だろ？俺の個人魔法なんだから。あれ？どうした二人とも？」

「……（ポカーン）」

《失礼、リリア殿。》

だれの声だ？と思ったらバルディッシュか、そういえばお前喋れたんだっけ…。

《どうしました？バルディッシュさん。》

《今フィーア殿はコレを魔法とおっしゃいました？》

《そうですね、それがなにか？》

《確かに発動中はファイア殿から魔力を確認できました…しかし、今そのフライパンから微塵も魔力を感じないので…まるで“ただの”フライパンのように…。》

「!？。バルディツシュ、それ本当!？」

魔導師としてフェイトは驚愕した。確かに、鉄製に近い剣や盾を出す魔法は少なからずあるし、バルディツシュみたいな存在もある。しかしそれは、当然それらを生み出すために魔力を消費し、同時にその形を“維持”するためにも魔力を消費する。そのため、その魔法の使用者から離れすぎたり、使用者が死んだりするとそれらは消滅する。それらを存在させ続けるにはデバイスのように、もとからこの世に存在する物質を混ぜたり、ロストログアのようにそれ自体に魔力を持たせるしか無いのである。そのはずなのだが…。

「一応確認してみるか？ほれ。」

「……本当に本物の鉄製の“ただのフライパン”だ…。」

《もしかして、ミッドチルダにはこういう魔法無いんですか？バル

ドイツシュさん。》

《その通りですリリア殿。フィーア殿が今行った魔法は我々からしたら『無から有を創る』に等しい行いです。正直、目の前で見ても信じられません。》

魔力だけでこの世に物質を文字通り『産み出す』なんて真似、誰にも出来ないし誰も知らない。にもかかわらず、フィーアはあっさりとやってのけた。

「確かにこの魔法で作った物は俺が離れようが死のうが独立した存在を維持するが…魔法だけでやった訳じゃ無いしそんなに大層なものじゃないぞ？科学知識がなきゃただの宴会芸が関の山だこんなの。」

まあ、戦闘に使えるレベルまで発展させたけどね…。

「そんなことないよ！！フィーアってすごいよ！！」

フェイトが目をキラキラさせながらそう言うてきた…なんだろう、なんかこうフェイトを喜ばせるのって、なんか…こっちも色々癒されるような…。

《いい加減料理始めませんか？》

「うおっ、忘れかけてた。さて、今後のために色々と創らせる。」

さっきと同じように他の調理器具をいくつか創りだす。（そのたびにフェイトは目をキラキラさせてた）

「さて、はじめるか。」

「今更だけどフィーアって料理できんのかい？」

《愚問ですよアルフさん。ベルフィーアの軍人はみな料理が自然と上達するのです。》

「……あ、やべ…訓練時代を思い出したら涙が…。」

ベルフィーアの訓練兵は入隊初日に御馳走を食わされる。しかしその翌日から三カ月間、出てくる食事は腐っていたり、ヘドロ漬けだったり、毒入りだったりと悪質な嫌がらせのようなメニューが解毒薬と一緒に出される日々が続く。免疫をつけるためなのと贅沢を簡単に言わせなくするのが目的らしいのだが、素直に従う者ばかりなわけもなく、こっそり食材を仕入れて料理する輩も少なくなかった。だってやっぱりおいしいもの食べたいじゃん？と言ってもやっぱり



《リリア殿…味覚あるんですか…？》

《気にしたら負けです。》

《…そうですね。》

## 第十五話（後書き）

次回、魔獣と魔人と魔王と死神がエンカウント。夜天の主は……どうしよう……。

## 第十六話（前書き）

うっかり投稿する前に消してしまい、ようやく携帯で半分くらい書  
けました…せっかくジュエルシードのどこまで書いたのに…チクシ  
ヨウ（泣）



## 第十六話

ファイア side

カポーン

「あ~~~~生き帰る~~~~。」

騒動続きの二日間と何も無かった数日を経て、ファイア達はフェイトが福引きで手に入れたチケットで海鳴市の温泉宿に来ていた。そして早速ファイアは温泉を堪能中である。

「ベルファイアや同盟世界にも温泉はあったが、ここは格別だ。」

この町、さり気なくなんでもあるから観光地として連邦と交流持てないかな？と本気で考えていたら新たに二人の温泉客が入ってきた。

「どうした恭也、そわそわして？」

「いや、なんだかなのは達に淫獣の魔の手が迫ってる気がして…。」

「なんだそりゃ？」

一見するとただの親子（兄弟にも見える）なのだが…。

（明らかに雰囲気一般人と違うじゃねえか…。）

フィーアはこの二人から戦場の匂いを感じた。魔力こそ感じないが、おそらく実力は先日撃退した男がゴミのように感じるぐらい強いだろう…まあ、実際ゴミのように弱かったが…。

（少々手合わせ願いたいものだが、互いに休息を取りにきた身のようにだし、自重するか。それにしても、本当にこの町はなんでもあり、なんでも居るんだな…。）

主に魔導師とかチンピラとか使い魔とか人外なケーキ屋とか…。なんて思考にふけていたら、フィーアはこの二人の会話に『なのは』と言う名前が出たことに気付けなかった…。

「…はあ、はやての奴大丈夫かな…？アリア、頼むから絶対に他人の胸揉ませるなよ？」

何やら今度は苦労性と哀愁感を漂わせる客が入ってきた。

「ん？あんたはこの前のお客さん？」

「おや、どうもこんにちは。あなた方も来てたんですか？」

「ええ、家族とその友達たちと一緒に。」

三人は顔見知りらしく世間話を始めた。一方フィーアはそろそろのぼせてきたので温泉から出ることにした。

「おっと、失礼。」

「あ、すいません。」

去り際に三人目の客と目があつた。男は緑色の目をしていたが、それ以外なにも感じなかった。

「それにしても、いい湯だった。また来たいもんだ。」

温泉から出て定番と言われる牛乳を飲みながらくつろぐフィーア。

そこへ…。

(ちょっと、フィーア。)

(アルフか。どうした?)

アルフから念話が届いた。なにやら困っているようだが、たいしたことでは無いだろうと思いい、フィーアは牛乳を飲みながら話を聞こうとした。

(この前フィーアが投げ飛ばした子がいるんだけど?)

それを聞いた瞬間フィーアは牛乳を勢いよく吹きだした。

## 第十六話（後書き）

次回、魔獣が魔王と魔人とエンカウト。あ、魔人とは会ってた…。

## 第十七話（前書き）

魔王誕生早期化。そしてちょい長い、昨日の分は半分もいってなかったように…。

## 第十七話

なのは s i d e

私は今日、家族と友達のみんなで温泉旅行に来ていた。だけど、アリサちゃんとすずかちゃんと一緒に居たところに突然、知らない女の人が話しかけてきた。それも普通の会話をしながら念話で。話によると、先日会った金髪の魔導師の子の使い魔だったらしい。しかも……。

（ちょっと、ジュエルシードの回収に関して相談したいんだけど……）

また襲われたり脅されたりするのかわと思ったら、割と穏やかな内容で正直、意外だった。ユーノ君もちょっと戸惑っている。

（この前は襲ってきたのになんで急に？）

（いや、正直言うとアタシたちも最初はアンタらのこと邪魔者として見ようとしてなかったんだけどね？アタシたちの仲間が場合によっては一緒に協力したいって言ってるのよ。）

これは、ちょっと朗報なの。ジュエルシードの回収を手伝ってもらえるならそれにこしたことは無いし。それに…その仲間って言うのは多分……。

(ま、お互い今日は遊びに来ただけだから、別にすぐに話し合わなくてもいいって言うてたよ。日にちもそっちが決めていいってさ。)

その言葉にユーノ君(淫獣形態)は少し考えるような仕草をした。そして、

(分かりました。では明日あたりにでも会って話しましょう。)

(あいよ、フィアに伝えとくね。それじゃあ明日ね。)

女の人、あの時の子の使い魔さんは帰っていった。念話中もアリサちゃん達に不審に思われないように普通の会話もちゃんと続けていたようで、内容は聞いてなかったけど二人の表情からして、そんなに悪い内容では無かったみたい。それにしても…ふふふ……。

(いや)、よかったよ。これでジュエルシードの回収もきつと楽に…なのは……?)



「ふふふ…フイアって言うんだ、あの時の人…ふふふふふふふふふふふ…。」

フイアは分からなかったが、あの時フイアに投げ飛ばされたなのは宙を舞い、“ユーノの結界に顔面から衝突し”、そのまま顔面から地面に落ちるの三連コンボになっていたのである。そのため、彼の予想以上にあのことを根に持っているのである。

「少し頭冷やしてもらって『O H A N A S H I』するの…ふふふふふふふ…。」

「す、すずか…、なのはったらどうしちゃったの…?」

「さ、さあ…?」

アリサとすずか、そしてユーノはなのはから黒い何かが滲み出てくる気がしたが、怖かったのでそれ以上何も言えなかった…。

フイア s i d e

あれから時間も経って今は夜中。フイアとフェイトとアルフの三

人は旅館から少し離れた森に居る。すっかり堪能したので帰ろうとしていたのだが、突如ジュエルシードの反応を確認したのでトンボ帰りしてきたのである。

「あゝあ、タイミングがいいのか悪いのか…。この距離じゃあ、あの二人もすぐに来るよな？」

「そうだね。」

「あの子、去り際にすごい怖い笑い方してたけど…?」

「帰っていい?」

《いやあなたはダメでしょう。》

まずい、思った以上にあのことを怒っているようだ…。どうやって許してもらおう…。あれ?誰かの気配がする…。いや違う、これは殺気だ!!

「ちよ、なのは落ち着いて!!」

「【ディバイン・バスター】!!」



「今度は外さないの。」

「そつちの意味かい!？」

フィーアに魔法を撃った白い魔王…もとい白い魔導師、高町なのはがそこにいた。ユーノは肩にのっている。

「落ち着いてなのは!! 僕たちは話し合いをするんであって、戦いに来たんじゃないからね!？」

「分かってるよユーノ君、『OHANA SHIAI』でしょ?」

「多分違う!!」

終始笑顔だが相当ご立腹のようである。アルフは野生の本能故かすでにビビりきっている。正直フィーアも今すぐ逃げたい。生憎、敵と認識していない相手と戦う神経は持ち合わせていない。自慢の悪知恵は使ったあとが怖いのでやめておきたい…。

「ちょっとフィーア、アンタがどうにかしてよ?」

「私もあの時はフィーアが悪いと思うよ。だから、頑張ってるね？」

「魔王の生贄になるのを頑張れと？ていうか、お前だって最初アイツのこと襲おうとしてたろ！？」

チクセウ、味方がいねえ…。なんであんなことしたのか今更ながら悔やんでも悔やみきれねえが、マジでどうしよう…。

《お話し中失礼、なのはさん、でしたっけ？》

「え？あなたは？」

《フィーアの部下兼相棒であるリリアと申します。この度はうちの相棒がご迷惑お掛けしました。》

「ふえ！？いや、ご丁寧にどうも…。」

おお！！救いの神が降誕なされた！！頼むぞ我が相棒。この場を丸く収めてくれい！！



「それじゃあ遠慮なく、一発やらせるなの。」

「何故か卑猥に聴こえた!？」

「問答無用なの、『ディバイン・バスター』!!」

有無を言わせず、桜色の魔砲がフィアを飲み込んだ。

くしばらくお待ちください

「あゝ、未恐ろしい威力だった…。」

「…チツ。」

舌打ちしやがったよコイツ…。だがどうにか先日のは水に流してもらえた。今は互いの軽い自己紹介をすることにした。

「私、なのは。高町なのはっています。あと、私のデバイスのレ  
イジングハート。」

《初めまして。》

「僕はユーノ・スクライアです。」

『高町なのは』と『レイジング・ハート』、それに『ユーノ・スクライア』。っと。なのはは地元の間人っぽいがユーノはどうみても違うな…まあ、いいか。

「私はフェイト。フェイト・テストロツサ。そしてこっちが私の使い魔のアルフと、デバイスのバルディッシュ。」

「さっきも会ったけどね。よろしく。」

《以後お見知り置きを。》

「んで、俺はファイア・レイガードだ。あの時はホントにスマンかった…。そしてさっきも名乗ったが部下兼相棒のリリアだ。」

《どうも。》

簡単な自己紹介を終え、身元や素性の詳細うんぬんは今度にして、今はとりあえず先にジュエルシードの封印をしておこうというこ



とになった。

「ところでユーノ。」

「なんですかフィーアさん？」

「お前って封鎖結界張れるよな？」

「?…ええ、張れますけど。」

「そうか、分かった。」

アルフと二人がかりで張ってもらえばそれなりに頑丈な結界ができる筈。そうなれば、もう少しだけ…

本気が出せる。

《ッ!? フィーア!!》

「どっした？」

リリアが珍しくうるたえた声を出す。しかし次の言葉は全員を驚愕させた。

《ジュエルシードの反応が消えました！！》

「「「「なっ！？」「」「」

「っ！！先に行ってるぞ！！」

言うや否やファイアは一人走りだす。

「ちよっと待つてよ、ファイア！！って速っ！！」

走り出したファイアのスピードは、魔法で身体能力を上げたフェイトを凌駕していた。あっという間にフェイト達は置いてかれてしまった。

そして、ついにファイアは先程までジュエルシードの反応があった場所に辿り着く。しかし、そこには二人の先客がいた。片方は地に倒れ伏せ、もう片方は茶色いスーツを着ており、魔力反応が無くなったジュエルシードを片手に倒れている男を見おろしていた。そし

て、男はゆっくりと視線をこちらに向け、口を開く。

「…ほう、新手か。」

その男の髪の色はグレーだった。

「昔から懲りない奴らだな、貴様らは…。」

その男の瞳は緑色だった。

「だが、いいだろう!! 何度でも来ると言っなら、何度も叩き潰してみせよう!!」

その男の殺気は自分に匹敵していた。

「かかって来るがいい!! 目の前の敵は全て我が屠る、ただそれだけだ!!」

闇に恐れられし、怪物二人の戦いが今、始まるうとしていた。



第十七話（後書き）

次回激戦

## 第十八話（前書き）

キリが悪いので前置きと本格的戦闘に分割。

## 第十八話

ユーノside

フィアに置いて行かれたユーノ達は、ただひたすらジュエルシードがあつた筈の場所へ向かっていた。

「フィアがこんなに足が速いとは思わなかった…。」

「よく考えたら、いつどこにいてもジュエルシードのある場所にすぐ来たよね…。」

フィアのスピードに半ば全員驚く中、ユーノはジュエルシードの反応が消えたことについて考えていた。

(ジュエルシードは一度暴走すれば誰かが止めない限り暴走は終わらない筈…。なのに、反応が無くなったという事は…まさか、まだ彼女達以外に誰かが集めているのか!?)

そう推測をたてた瞬間…。

ドゴオオン！！

轟音と共に、黒い何かが周囲の木々をなぎ倒しながら飛んできた。

「な、何なの!?!」

なのはが驚きの声を上げる。そして、フェイトとアルフも驚愕の表情を浮かべていた。しかし、なのはが飛んできたモノが何なのか判らなくて驚愕したのに対し、フェイトとアルフは飛んできたモノが何なのか判ってしまい驚いていた…。何故なら、ソレは黒いフード付きジャンパーを着ており、右手に刀とサーベルが混ざったような剣、左手に銃身がやや長いピストルを持っていた…。

「フイーア!?!」

赤みを帯びた茶髪の青年、フイーアがフェイト達の足元に倒れていた。

みらい side



さっきまでジュエルシールドがあつた場所はすっかり様変わりしていた。周囲の木々は真つ二つに斬られたものや、根元から折れたもので溢れ、地面にはいくつかのクレーターができていた。そんな中、ひとつの人影が残っていた。

「クソツ…やっってくれる…。」

先程フィアをブツ飛ばしたみらいは片膝をつき、自分の愛銃『オ  
ルギニス』で体を支えながら忌々しそうに呟いた。銃剣と刃による  
打撃斬撃の応酬のさなか、フィアの蹴りがみらいの側頭部を捉え  
たのである。しかし、蹴られると同時にみらいも全力でフィアを  
殴り飛ばした。向こうの彼方まで吹き飛ばしてやったのだが、やは  
りフィアの蹴りは強烈でかなり効いたようである。まだ頭が揺れ  
る…。

「こじばらく“奴ら”みたいな三下しか相手をしてなかつたせい  
か、少々鈍ったか…。」

チラリと倒れている男に目をやる。みらいは、はやて達と共に旅館  
でとつくに就寝していたのだが、先日から何度も確認している例の  
魔力反応を旅館の付近で感じてしまったのである。流石にこの距離  
は近すぎると思い、はやてのことは最近すっかり仲良くなった『リ  
ーゼアリア』に任せて、大惨事に至る前にこっそり処理することに  
したのである。

目的地に着くと例の反応物が魔力を放出しており、危険な雰囲気

出していた。即座に自分の魔法で強制的に制御したのだが、そこへ見覚えのある格好をした人物が現れた。2年前から八神家に散々ちよっかいを出してきたどこぞの組織の人間と同じ格好だった。

「そいつを渡しても」(バキィツ!!) 「。」

「だが断る。」

見慣れた敵だったので迷わず速攻で顎に拳を叩き込み、沈黙させた。その矢先にジュエルシードの反応が消えたために警戒心丸出しのフイアが現れたのである。それを敵意と感じたみらいは、フイアを奴らの仲間とほぼ断定してしまい戦闘を開始、今に至る。

(それにしても、今の奴は随分な手練だった…。もう少し、続けたかったものだが…。)

ようやく頭痛も治まり、みらいはその場を去ろうとするが途中で足を止める。その表情は歓喜を示すように、うっすら笑みが浮かんでいた。そして、振り向く。

「殺す気でやったんだがな…。」

「こっちも首を飛ばしてやったつもりだったんだけどな。」

奴は…、久々の“強敵”はピンピンしていた。まだ、この時間を楽しむことができる。こちらは最低限の用事は済ませてある。気にするべきは、朝日のみ。だが、生憎まだ夜は続く。はやてが目を覚ますまで時間はまだある。なにより、目の前の存在は奴らの仲間（誤解）。今帰る理由はない！！

「続きといこうか…。」

「望むところだ…。」

「ちょっと待って下さい！！」

二人のやり取りに割って入る声、ユーノの声が響いた。フェイト達のもとにブツ飛ばされたフィアはあの後すぐに起き上がり、そのままみんなと一緒にこっちに来たのである。ユーノは言葉を続ける。

「あなたがそのジュエルシードを封印したのですか？」

「何だ？喋るイタチ？…ふむ、これはジュエルシードと言うのか。確かにコレは俺が暴走を止めた。」

「ソレはとても危険な物なんです！！なんの目的があつて集めてるんですか！？」

みらいに問い詰めるユーノ。しかし、彼らにとって意外な返事が返ってきた。

「む？俺はこんなものいらぬ。」

「「「「え？「「「「

「俺はただコレが危険なのは分かったから始末しにきたただけだ。逆に問うがお前ら、“アレ”はお前らの仲間か？」

そう言ってみらいが指差す方を見る。そこにはユーノ達には見覚えのない、フィーアには心当たりのある格好をした男が倒れていた。

「…いえ、知りません。僕の仲間は今のはただけです。この人たちは僕達に今後協力してくれるかもしれない方々です。」

お互いの素性と事情は明日説明しあう予定でしたが…そう言っユ一ノは締めくくった。それに対しみらいは少し考えるようにしてから口を開く。

「なるほど、嘘ではないようだ…。俺もこんな物騒なモノはいらぬ。悪用するわけでもなさそうだし、欲しいのならくれてやる。」

「ありがとうございます。」

「ただ、ひとつ頼みたいことがある。」

「え?」

ジュエルシードをユーノに投げ渡し、おもむろに言い出す。フィーアの方を見ながら…。

「不完全燃焼で帰りたくないのだから…、少し“さっきの続き”がしたい。」

うつすら笑みを浮かべてそう言った。ユーノは目が点になり、なのはは思わず叫ぶ。

「な、なんですか!?!話し合いも済んで、もうお互い用は無いでしょう!?!」

「いや、本来ならここで帰ったのだが…、なにぶん久々に“本当の意味で”戦えそうなのでな。」

ここ最近はや一方的な“奴ら”の駆除作業しかしておらず、戦いと呼べるようなものじゃ無かった…。

だが、今、目の前に居るのは…。

「いいだろう、俺ももまだ物足りなかったところだ…。アルフ、ユノ、結界を頼む。」

本物の敵、本物の強者、本物の戦いが目の前にある。

「本当に今更だが、“お前も”あそこでのびてる奴の仲間では無いんだな？」

「…正体に心当たりはあるが、俺の仲間は今はこの子達だけだよ。」

そう言ってフィーアはフェイトとアルフ達の方に視線をやる。

「そうか、さっきは勘違いしてすまなかった。」

「気にしなくて結構。では、色々と仕切り直しといこつか？結界張つてもらったから“お互い少し本気出せる”ぜ？」

「ありがたい。」

感じるのは歓喜、高揚、闘志。ならば、することはただ一つ

…。

「「さあ、楽しもう（殺し合おう）かつー！」「」

今はただ獣の如く、本能のままに！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0721x/>

---

漂流者はハイブリッドな現役将校～オヒトヨシナシニゾコナイ～

2011年10月26日10時16分発行